

2. 杉原荘介が日本考古学界に果たした役割

石川 日出志

(1) 異色の考古学者

考古学者・杉原荘介（1913.12.6 - 1983.9.1）は、明治大学の70歳定年を残りわずか半年にしてこの世を去った。杉原は、戦前～戦後に収集した欧米の書籍類や、1957年以後に交流した北アメリカの考古学・文化人類学研究者から受領した抜刷類を、晩年意識して大学・考古学研究室に寄贈していた。しかし、早い最期であったこともあり、ご自宅には書籍類を含む雑多な資料が残された。葬儀を終えた数か月後に、大塚初重・戸沢充則はじめ、院生を含む残された研究室スタッフで市川市平田の杉原邸を訪れ、ご遺族ご諒承のもとに資料の扱いを相談した。個人所蔵図書の種類はすでに大学図書館では一括受入れしない方針であったことから、特に重要な数冊以外は生前長らく親交のあった小宮山書店扱いとなった。それ以外はまさしく雑多な資料群であったが、大塚・戸沢両氏の提案に従い、杉原荘介＝明治大学考古学関連資料としてすべて大学に寄贈していただいた。

本研究で「杉原荘介資料」と呼ぶ資料群は、こうして明治大学考古学陳列館（当時、のち考古学博物館を経て、現在明治大学博物館考古学部門）に搬入されたものである。しかし、まさしく雑多な資料群であることや、その後大学の各種の実務的改革が進行したことへの優先対応の結果、資料の整理がなされないままになっていた。その内容の一部（日本考古学協会設立時の書類）は、板橋区郷土資料館『特別展：考古学の基礎を固めた巨人 杉原荘介と前野町遺跡』に収録されているが、そ例外は未公表のままであった。今回、明治大学博物館所蔵資料の整理を行い、個人情報扱いなど法的な要件が満たされる資料についてはデジタル公開する条件を整えた。必ずしも体系的な資料とは言えないが、杉原が文部省時代に尽力した日本考古学協会設立に関する資料や、海外の研究者との交流の実態、研究成果を出版する構想など、戦後日本考古学史の具体的な像を把握する上で重要な資料を含んでいる。

まず、杉原荘介の略歴をみておこう。杉原は、1913（大正2）年12月6日に、父半・母宗穂の三男として東京市日本橋区小舟町三丁目六番地に生まれた。1923年の関東大震災で生家の日本橋杉原商店が被災したために、一家で市川市平田に居を移し、府立三中時代に姥山貝塚の威容に接して考古学に目覚める。しかし、長兄・次兄は早世したため、府立三中（現両国高校）卒業後、18歳で越前和紙杉原紙を扱う日本橋・杉原商店を継ぐこととなり、大学で考古学を専門的に学ぶことは叶わなかった。考古学は独学で、武蔵野会で鳥居龍蔵の指導を仰ぎ、のち東京考古学会を主宰する森本六爾に師事するようになるが、森本も1936年には亡くなる。家業を継いで間もなく、朝鮮半島から遼東半島へ、そして樺太の遺跡に出かけ、また家業の傍ら東京外大専修科でフラ



第1図 杉原荘介

ンス語、上智大学でドイツ語を学んだのは鳥居の影響であろう。父半が亡くなり、結婚したのち27歳で明治大学専門部文科に入学する。これは帝室博物館時代から親交がある後藤守一が考古学の講義を担当していたことと通学の便によるのであろう。しかし、この偶然が杉原の、そして戦後明治大学考古学の道をつくることになった。1943年9月に専門部文化文科を首席で卒業して文部省の内定を得る（今回杉

原日記によって判明)が、応召により杉原商店を閉じて大陸に赴く。考古学に目覚めた市川で、縄文時代の姥山貝塚と古代の下総国府の間を弥生・古墳時代の須和田遺跡が繋ぐことに気づいたらしく、また晩年の森本六爾の影響もあって、明治大学入学前から弥生時代を専門としていた。

戦後1946年1月に復員して同年4月に文部省嘱託、1947年8月に文部事務官科学教育局勤務となる。この間、1947年4月に明治大学専門部文科講師(兼任)となり、翌1948年に助教授となる。戦地の上海で旧知の江坂輝弥に1943年に発見され注目されたものの応急的調査にとどまった静岡市登呂遺跡を自分が主導して調査すると語ったと伝えられるように、1947年に明治大学の後藤守一を代表者とする科学研究費によって登呂遺跡調査の道を開く。同時に進行した日本の考古学界の組織化、すなわち日本考古学協会の設立にも文部省の担当官として実務に当たった。明治大学では、新制大学発足に一年遅れる1950年4月に考古学専攻が開設されるのに尽力した。1953年に教授となり、後藤が定年退職した1960年4月から晩年の1980年3月まで主任教授をつとめ、明治大学の考古学＝杉原という色彩を鮮やかにした。考古学者・杉原荘介の研究・活動は、①日本考古学界の組織化とプロジェクト研究の実践、②日本における旧石器時代文化研究の本格的創始と体系化、③弥生時代文化の総合研究と組織的な調査、および成果の社会発信、④海外考古学界との積極的交流、の4点に特色がある。本研究における杉原荘介資料の調査から、ここでは①と④に焦点を当てることとする。

(2) 日本考古学界の組織化：1940年代後半

杉原の考古学界での動きは、越前和紙杉原商店の「若旦那」としての経験・性向が色濃く反映している。11歳年長の山内清男から「荘介旦那」と名付けられたように、学界では、杉原はことを進める際の強引さが語り草になっていた。一方、大学では、若旦那としての力わざとともに、若者を統率するツボを押さえる機微も備えており、また学界でも行政面等での実行力を評価する小林行雄のような声もある。考古学者杉原荘介の動きにはこれらが随所に現れ、様々な逸話も残るが、ここでは事実確認できることのみをとり上げる。

杉原は、鳥居龍蔵を師事したのち、同じ在野で10歳年長の森本六爾を慕うようになる。森本が1930年1月に東京考古学会を組織すると、杉原は府立三中を卒業して家業に就いた翌1931年に入会し、1933年春から森本に急接近する。須和田遺跡の調査に熱中し、東京外語大学でフランス語を学び始める年でもある。森本六爾は1936年1月22日に32歳で逝去するが、杉原は森本最晩年の論文「弥生式石器と弥生式土器」を口述筆記して感涙する。森本の晩年、東京考古学会の機関誌『考古学』の編集等を継続するために、主力同人の坪井良平が1935年秋に事務局を大阪に移す。ところが、1938年秋になって「東京考古学会の本部が関西にあるのはおかしいじゃないかという意見が一部の会員からあった」(乙益重隆証言)として、東京考古学会東京研究所が日本橋杉原商店の2階に設けられる。この「一部の会員」は杉原としか考えようがないが、直ちに月例会を開催する方針を立て、初回の9月は杉原がすでに調査していた船橋市飛ノ台貝塚の見学会、11月には小林行雄の尽力で10月に図版編が刊行された『弥生式土器聚成図録』刊行記念講演会を杉原の地元・日本橋で開催する。主導権を発揮しようという杉原の意思が強く感じられる。

しかし、1941年2月16日に、国策により東京考古学会は考古学研究会(京都)・中部考古学会と合併して日本古代文化学会が設立され、後藤守一が委員長となる。杉原がそこでどのような立ち位置を採った

かを知る資料がないのが、推測ながら傍観していたとは考え難い。ちなみに、杉原は、戦後の1947年12月7日（杉原満34歳誕生日の翌日）に東京考古学会再開を図って自ら同人代表となり、翌1948年9月に明治大学考古学研究室「東京考古学会」として『考古学集刊』第1冊を発行する。

杉原の活躍は戦後約10年間がもっとも顕著である。文部省に席を得たことと、そのあと明治大学に専任教員としての位置を確保したことが大きい。第一の動きは、戦中に上海で江坂に調査への意欲を語ったという静岡市登呂遺跡の発掘調査と、学会組織の再編＝日本考古学協会の設立にかかわる。

現在、日本の考古学界を代表する学会組織である日本考古学協会は、静岡市登呂遺跡の共同調査がきっかけとなって設立されたと言われることが多い。確かに、1947年度の科学研究費に後藤守一の登呂遺跡調査計画が採択され、登呂遺跡調査会という共同調査が進められたが、文部省から科研費による共同調査であるなら学会的組織であるべきだと指導を受けて日本考古学協会が設立されたというのである。しかし、正確ではない。

設立に至る経緯は、初代委員長となった藤田亮策（1951「考古学一般」『日本考古学年報』1）と、設立に向けた実務を担当した杉原荘介（1948「学界消息」『考古学集刊』1）に記録が公にされており、特に設立直後に刊行された後者にはかなり詳しい記述がある。しかも両記録に齟齬はない。

それによると、登呂遺跡の調査については1947年3月21日に協議が始まったが、研究の組織化を目指す動きは、それよりも早く、前年の1946年8月28日に始まっている。文部省人文科学研究課長犬丸秀雄が、国立の歴史科学研究所設立案検討の一環として考古学部門の原案を得ようと、日本考古学会の原田淑人と日本古代文化学会の後藤守一と会談したのである。そこでは既存学会の再編を危惧する原田から慎重論が出された。おそらくは1941年の考古学に関する民間の3学会が国策に沿って日本古代文化学会に一本化されたことが想起されたのであろう。それでも議論を進めようと11月30日に文部省教科書局歴史編纂係室で若手考古学者だけで意見交換したが、ここでも前向きな意見は出ないままであった。杉原は「若い学者の行動が如何に老成学者に限定されているかということ、及び若い学者が如何に学界のあり方について不真面目であり、無気力であるかということを示した」と憤慨する。杉原は同室に勤務しており、同席したというよりもこの席を設定した張本人とみるべきであろう。

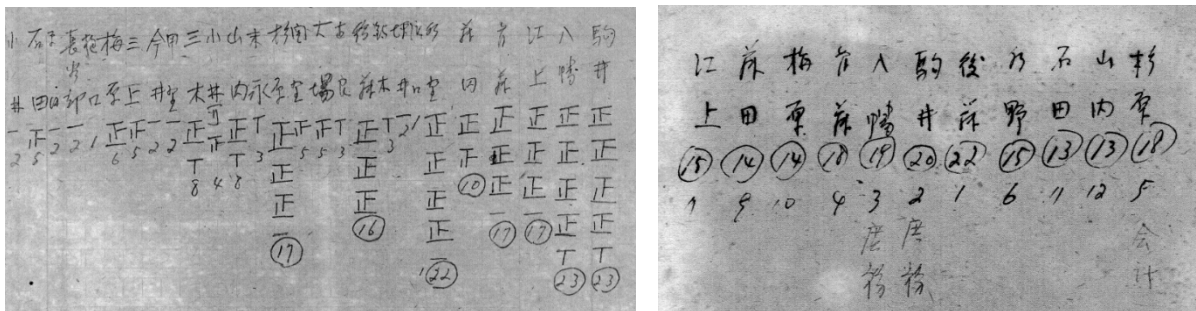
ところが、それから3か月余りのちの1947年3月21日に、東京帝国大学考古学研究室で登呂遺跡発掘発起人会が発足し、委員長今井登志喜、幹事駒井和愛・杉原荘介・大場磐雄、等による登呂遺跡調査会が組織される。実は、人文科学課に異動して科研費担当となった杉原が後藤に登呂遺跡の発掘調査・研究で科研費申請を促したことを、のちに杉原が証言している（1981『地歴科から史学地理学科へ—考古学専攻創設の頃—』明治大学文学部）。しかし、専門部しかない明治大学に籍のある後藤では、調査を具体化することは物理的に不可能であることなどから、東京圏の各大学・博物館・文部省などに所属する研究者が共同することによって登呂遺跡の調査が遂行された。登呂遺跡調査会の設立によって、東京圏の考古学者の組織化が一気に進んだのである。

そして初年度の調査中の8月7日に一時帰京した杉原は、森戸辰男文部大臣から調査の国庫補助を継続するには「調査会が全国的な学者の参加団体であることが望ましい」と申し渡される。それを受けて調査後ただちに次年度の調査体制整備に向けて準備委員会が組織される。前年の会合では学界の組織化に慎重な立場をとっていた原田淑人がここから積極派に転じる。12月10日・17日・18日・22日に各所で意見聴取し、28日に日本学士院で原田・池内宏・後藤守一・石田茂作と犬丸課長と会談して全国学会

設立意見でまとまり、第1回考古学協議会となる。さらに年明けの1月9日に第2回が開かれ、長谷部言人・藤田亮策と、梅原末治の代理水野清一の意見も聴取して、委員の人選まで行われ、ここに登呂遺跡調査と切り離し、学会設立が決定的となる。2月5日に日本考古学協会設立準備会が発足し、2・3月に4回の会合を経て、4月2日に設立総会が開催された。森戸大臣の方針提示からわずか8か月たらずの間に一気に組織化が実現した。

この一連の動きの中心人物は文部省人文科学研究課長の犬丸秀雄であるが、何も考古学界だけの組織化を狙っていたわけではない。犬丸は、第2次世界大戦中、欧州の学術文献の収集が途切れることへの対処として官員を欧州に派遣し、さらに1943年から2か年自ら欧州各国に出張して情報収集した。そして帰国2か月後の1945年7月に文部省教化局教化課長、敗戦後の1946年2月に科学教育局人文科学研究課長となり、1947年8月には、1年半後に学術会議が発足する道を用意する学術体制刷新委員会を設置する。いわば学術界全体の体制整備の動きを見据えた考古学界の体制整備であった。別の見方をすれば、犬丸自身が考古学界に実務的に働きかける余裕がある状況にはない。杉原が、他ならぬ自ら再興した東京考古学会が発行する新雑誌『考古学集刊』第1冊の末尾に、同会の「会報」として、自らの名前を記さないままに日本考古学協会が設立されるまでの経過を詳細に記録したのは、自らの実務ぶりを明示したかったからであろう。犬丸と杉原の連携によって日本考古学協会は発足した。登呂遺跡調査に向けた協議が始まる前から学会設立の動きがあったのである。しかし、登呂遺跡の調査がなければ、日考協設立はさらに相当の年月を要したであろう。

なお、1948年4月2日に国立博物館で開催された設立総会は、初代委員長の選出が難航したと伝えられる。しかし、それを具体的に示す資料がなかった。ところが、杉原資料を整理する中で、藁半紙に杉原の筆跡で10数名の人名と数字や画線法の「正」字が鉛筆書きされたメモが2枚あった。それ以外に何も記されていないが、その内容はまさしく日本考古学協会設立総会の予備選挙と本選挙のメモである。



第2図 日本考古学協会初代委員長選出に関する杉原メモ

最終的に選出されたのは、委員長が藤田亮策（57歳）、委員が梅原末治（54歳）・後藤守一（59歳）・駒井和愛（43歳）・八幡一郎（45歳）・斎藤忠（39歳）・江上波夫（41歳）・水野清一（43歳）・石田茂作（53歳）・山内清男（46歳）・杉原荘介（34歳）である。しかし、第2図左のメモAでは、26名と画線法の「正」字と丸数字が記され、苗字と丸数字を拾うと「駒井（和愛）⑬ 八幡（一郎）⑬ 江上（波夫）⑮ 斎藤（忠）⑮ 藤田（亮策）⑩ 水野（清一）⑫ 滝口（宏）① 坪井（良平）② 鈴木（尚）③ 後藤（守一）⑩ 直良（信夫）③ 大場（磐雄）⑤ 関野（雄）⑤ 杉原（荘介）⑮ 末永（雅雄）③ 山内（清男）⑧ 小林（行雄）④ 三木（文雄）⑧ 甲野（勇）② 三上（次男）⑤ 梅原（末治）

⑥ 樋口 (清之) ① 長谷部 (言人) ① 原田 (淑人) ② 石田 (茂作) ⑤ 小林 (知生) ②」とある (カッコ内石川補記)。丸数字を合計すると 212 となるが、「樋口」に画線法の「正」字が記されないのに①となっているように、得票数にすべて 1 が加算されているので、実際の総票数は 186 票である。発足時の会員が 81 名であるので、62 名が出席して各 3 票を投じたとみてよかろう。もう一枚のメモ B (第 2 図右) では、「杉原 (荘介) ⑬5 山内 (清男) ⑬12 石田 (茂作) ⑬11 水野 (清一) ⑮6 後藤 (守一) ⑳1 駒井 (和愛) ⑳2 八幡 (一郎) ⑲3 斎藤 (忠) ⑱4 梅原 (末治) ⑭10 藤田 (亮策) ⑭9 江上 (波夫) ⑮7」と 11 名の名と丸数字が記され、丸数字の下に得票順位が付されている (斎藤と杉原、梅原と藤田は同数だが順位付けされている)。メモ B の氏名は委員名簿と一致することから、メモ A が予備選挙、B が本選挙の結果とみてよい。ところが、初代委員長となったのは本選挙で得票数第 1 位の後藤守一ではなく、第 9 位の藤田亮策なのが不思議である。これが委員長の選出が難航したという言い伝えの実態である。なぜこのような事態となったのか、私は次のように判断する。

まず、メモ A と B それぞれの丸数字と画線法の「正」字の合計数が一致するので、本選挙も出席会員全員が投票したことが分かる。しかし、予備選挙で第 7 位だった後藤が本選挙で第 1 位に躍り出たことや、杉原が生前私たちに「後藤先生を委員長にしたかった」と漏らしたことがあるように、予備選挙結果が出た後で本選挙に向けた「運動」があったと推測される。予備選挙で下位であった梅原・藤田・石田・山内がいずれも大きく得票を伸ばしているのは、「運動」とともに、それに対する反発として下位層に票が集まる傾向が反映したものであろう。そして、得票順位が委員長選出に反映されていないのは、この 2 回の選挙はあくまで委員選挙であって、委員長選挙ではなかったからである。委員長選挙は、本選挙に残った 11 名だけで協議する「互選」方式が採られ、本選挙の得票順位とは別の論理で委員長が選出された。では、その論理とは何か。まず、後藤が得票数第 1 位であるにも関わらず、またおそらくは杉原が強く推したであろうにもかかわらず後藤が委員長にならなかった理由としては、後藤がその 7 年前に国策により民間 3 団体を合同して日本古代文化学会が設立された際の主導者であったことが考えられる。本選挙で第 4 位の斎藤と杉原は、当時文部省に所属しており、いわば学界の組織化を進めた当事者であるから、最初から対象外であったであろう。以上の 3 名を除くと、駒井 (43 歳)・八幡 (45 歳)・江上 (41 歳)・水野 (43 歳)・梅原 (54 歳)・藤田 (57 歳) が 8 位以内となるが、藤田以外は戦前の東亜考古学会の系譜にある東京大学と京都大学の在籍者であってライバル関係にあり、また藤田が最年長でもあった。藤田は当時専任の職がなかったことも中立的な立場とみなされたと推測することも可能である。

もちろん、これ以上踏み込むには他の資料が必要であるが、和文タイプ印刷による会則 (案) にペン字で加筆されたものが数種類あることを含めて、杉原資料は日本考古学協会という現在の日本考古学界を代表する学会が組織される過程を具体的に知る重要な資料ということができる。



第 2 図 杉原荘介 (左) と後藤守一
(1951 年 3 月)

(3) 特別委員会による共同調査とその後： 主に1950年代

こうして日本考古学協会が設立されたことにより、登呂遺跡の調査は、2年目の1948年からは日本考古学協会内に組織された登呂遺跡調査特別委員会に移り、1950年まで毎年夏に実施された。登呂遺跡以外でも、日本考古学協会内には初年度から「発掘並に出土品に関する法規」(長谷部言人委員長)・「上代古墳の総合的研究」(梅原末治委員長)、翌49年には「縄文式文化編年研究」(山内清男委員長)・「考古学現状調査」(藤田亮策委員長)の特別委員会が設けられ、1950年代末までに11の特別委員会が設置され、考古学上の諸問題・諸課題に大学の枠を越えて共同で調査・検討が進められた。そのなかで、登呂遺跡での経験を経て、もっとも共同調査が強力に実行されたのは「弥生式土器文化総合研究特別委員会」

(杉原荘介委員長)である。4か年に及ぶ登呂遺跡の調査が終わった翌1951年から始まり1961年まで、弥生文化の形成と波及・展開過程を追究して九州から伊勢湾沿岸までの弥生時代前・中期の遺跡が集中的に調査された。杉原は、戦前に、九州から関東までトレンチを入れて弥生文化の成立と波及過程を追究する方針を立てており、福岡県立屋敷遺跡や愛知県西志賀貝塚を調査していたが、その構想を学会の特別委員会で組織的に実現しようとした。しかも、弥生時代前期～中期の編年体系を構築するために、戦前の関東・東北の縄文土器の編年研究に倣うように、貝塚遺跡を集中的に調査する。

この一連の調査でもとりわけ、初年度から4か年(1951～54年)に互って調査された福岡市板付遺跡は、九州勢の岡崎敬(第1次調査主任)・森貞次郎(第2～4次調査主任)・金関丈夫ら、関西勢の金関恕・原口正三ら、東京勢の杉原荘介・乙益重隆・増田精一・曾野寿彦らが参加して、地域と大学を越えた共同調査として発掘調査が実施された。考古学者の所属機関を横断したこれほどの組織での共同調査は登呂遺跡以前にはなかった。戦前に、森本六爾が主催した東京考古学会と八幡一郎が主導した中部考古学会が、学会として課題を設けて共同で情報収集と研究を進めた事例はあるが、組織的な発掘調査ではない。設立時の日本考古学協会会則の2に設立の目的として「日本に於ける考古学者が提携して考古学の研究をすること」と掲げてある。1951年に刊行が始まる『日本考古学年報』も東京考古学会の取組みを継承するが、その内容ははるかに充実した。全国の考古学研究の成果を会員のみならず誰もが知り得、十分とは言えないまでも、それぞれに研究する条件が整えられた。この共同調査の実践と、年報による情報の共有は、日本考古学協会の発足によって初めて実現したものであることを強調しておきたい。そして、この共同調査方式は、日本考古学協会以外の調査にも継承されることになる。

1949年1月26日早朝、戦前の1939年から始まった昭和の大修理がなお進められていた法隆寺で金堂で火災が発生し、金堂壁画が激しく焼損する事態が発生した。これを契機として、日本における議員立法第1号である文化財保護法が1950年に施行される。同法には、国自体が発掘できる条項も盛り込まれ、1951年の愛知県吉胡貝塚と秋田県大湯遺跡を皮切りにいわゆる国営発掘が始動した。ところが、文部省に設けられた文化財保護委員会に所属する斎藤忠が中心となって調査が立案されるが、国が発掘調査するにしても調査組織がないために、遺跡ごとに調査主任が設けられるとしても、登呂遺跡の場合と同様に組織的な共同調査として遂行されており、4か年に互る登呂遺跡調査の経験が活かされた。日本考古学協会の設立によって実現した共同調査が国営発掘にも波及したことになる。こうして国営調査は1968年まで断続的に進められるが、1952年に平城宮跡が特別史跡に指定されたことに伴って奈良国立文化財研究所が設置されて初めて国の調査研究組織が始動することとなった。

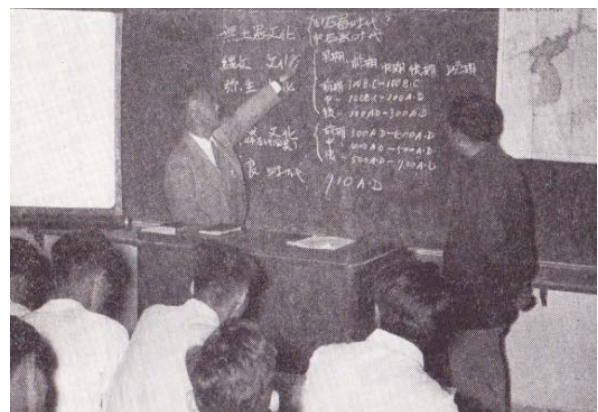
(4) 海外との研究交流

杉原荘介が果たした考古学界への貢献の特色あるものの一つに、海外との研究交流も上げるべきであろう。杉原の海外への視野は、若くして鳥居龍蔵に師事したことから始まった。鳥居が1896年以来繰り返してアジア各地を踏破して総合的人類学調査を行い、フランス語で研究成果を海外発信したことに刺戟されたのであろう。家業に就いた翌年の1932年に朝鮮半島の南山遺跡や遼東半島の郭家屯遺跡など、1933年には樺太の鈴谷貝塚などを訪れ、東京外語大学と上智大学でドイツ語とフランス語を学んだ。戦前から丸善書店で盛んに洋書を買って読んでいたのも、鳥居の存在が目標にあったのことに違いない。また、同じ頃、市川市須和田遺跡の発掘に熱中している時、亡命して須和田遺跡の一角に住んでいた郭沫若の知遇を得て、住居跡の平板測量を手伝ってもらったが、これも戦後になって杉原の研究の海外展開に大きな力となった。

こうした戦前の蓄積や経験が、思いがけず大きく展開するきっかけとなったのは、1949・50年に行われた群馬県岩宿遺跡の調査と研究であった。縄文時代以前の人類文化の存在を初めて実証することになったが、宿舎となった国瑞寺に合宿しながら、昼は調査し、夜はヨーロッパの旧石器時代研究の原書をもとに石器に関する専門用語の確認をしていたという。そして1956年に明治大学文学部(考古学)研究報告の第1冊として岩宿遺跡の調査研究報告が刊行されると、一躍海外展開を始動する。

それは中国訪問に始まるが、そのスタートは考古学の側からはまったくの偶然であった。それは、先に触れた犬丸秀雄が尽力して1949年に発足した日本学術会議が、1954年にソ連アカデミーから招待状を受け取り、翌年ソ連へ学術調査団を派遣した。そのソ連訪問の際に中国にも寄ってはどうかという意見があり、日本学術会議が中国科学院に打診したところ、郭沫若院長が来訪を歓迎すると回答したことから1955年6月に北京訪問が実現し、その際に中国訪日団の受け入れが協議され、その年の暮れに日本学術会議の招聘で郭沫若を団長とする中国学術訪日団が来日した。その郭団長の他10名の一行中唯一の考古学者である科学院考古研究所副所長の尹達が明治大学(考古学陳列館)を訪問したのである。そしてこの1年あまりのちの1957年4～6月に、中国科学院の招聘を受ける形で日本考古学協会と毎日新聞社主催により考古学訪中視察団が組織されて実現する(劉1992)。

その訪中団のメンバーは、団長が日本学士院会員で中国考古学の原田淑人、以下、杉村勇造(東京国立博物館土俗室長)・駒井和愛(東京大学教授)・水野清一(京都大学教授)・関野雄(東京大学助教授)・樋口隆康(京都大学講師)・岡崎敬(京都大学助手)と杉原荘介(明治大学教授)、それに毎日新聞社の安保久武(写真部長)・杉本要吉(学芸部員)という構成である。不思議なのは、中国考古学の専門および東京大学と京都大学、すなわち戦前の東亜考古学会の流れを汲む研究者集団の中で、杉原だけがこれからはずれるまったく異質なメンバーだという点である。杉原が一行に加わった経緯を具体的に知る資料はないが、杉原は前年に岩宿遺跡の調査研究報告を刊行し、日本の旧石器時代をアジアの中で位置づ



第3図 古脊椎動物研究室で岩宿遺跡の調査研究成果を報告する杉原荘介(1957年)

けるためには周口店遺跡をはじめとする中国の旧石器時代研究を把握する必要を強く意識したに違いない。実際、訪中時に科学院古脊椎動物研究所で「日本石器時代文化における最近の問題」と題する講演を行っている（第3図）。杉原がなぜ一行に加わることができたのかは詳らかではないが、最年長の杉村団長ともっとも若い樋口以外は日本考古学協会設立の経緯を直接見知っていたし、またおそらくは郭沫若の市川時代のことも話題の俎上に載せた可能性もあろう。そして杉原は、これを契機として、比較研究資料として、周口店遺跡や丁村遺跡という中国の旧石器時代の基準石器群の石膏複製品の寄贈を受け、それは現在も明治大学博物館に所蔵・展示されている。

1957年は、もうひとつ杉原の海外展開にとって大きな出来事があった。9月にスペインのマドリードで開催された第5回国際第四紀学会への出席である。1か月半の渡欧中に多くの研究者の知遇を得たが、とくにミシガン大学のJ. B. グリフィンと日本の石器時代の年代問題が話題となり、その後の神奈川県横須賀市夏島貝塚の縄文時代早期初頭の放射線炭素年代測定が実現する糸口を得る。1959年になって測定結果を受け取るが、これによってそのあと縄文時代の年代観に関する長期編年・短期編年の大論争を惹き起こしたことはよく知られている。さらに1960年になると、明治大学の創立80周年事業としてアラスカ総合調査（考古学・民族学・地理学）が企画され、杉原は考古学班の班長として岡田宏明・戸沢充則らとともにアラスカでの調査に臨むが、杉原は一行よりも10日早く日本を出発して、ミシガン大学放射性炭素実験室を訪問している。また、1965年に刊行された『日本の考古学Ⅰ 先土器時代』（河出書房新社）では、岩宿遺跡の調査ののち15年間に及ぶ先土器時代（旧石器時代）研究の成果を世界の旧石器時代研究の中に位置づけるべく、中国＝裴文中、シベリア＝A. P. オクラドニコフ、アラスカ＝H. B. コリンズ、ヨーロッパ＝P. E. スミスの執筆陣を揃える。そのあとがきに杉原が

裴文中先生とは1957年に北京でおあいし、周口店文化その他につき、実地について種々ご指導をねがった。オクラドニコフ先生は1957年、わざわざわたくしの研究室を訪問されたのであるが、あいにくわたくしが所用のため出張中であって、おあいできなかつた。コリンズ先生とは1960年にワシントンのスミソニアン研究所でおあいしたし、…（略）…スミス先生には…（略）…同年ハーバード大学で親身のご教示をいただいたのである。これらの諸先生がたは、それ以後も、なにかについてご指導をいただき、今日にいたっている。

と記したように、これらの研究者との知遇を得たのが1957～60年に集中している。杉原は、決して欧米やアジアへの渡航の機会は多くはないものの、その数少ない機会をきわめて有効に活用している。その布石は岩宿遺跡の報告に表れており、巻末に全27ページにも及ぶ英文要旨を収録し、海外の諸研究機関に寄贈する措置を採っている。その翌年に開催された国際第四紀学会への参加は、入念な準備を経ての積極行動であったとみるべきであろう。しかし1970年代になると、短期在外研究として1973年にヨーロッパに渡航はしているが、研究の主眼は旧石器時代よりもむしろ日本列島と東アジアの稲作農耕文化の起源問題の方に移り、韓国と中国の研究動向を注視するようになる。

1973年の夏にヨーロッパ諸国を歴訪したあと、10月には韓国を訪問し、釜山大学校で夜臼B式土器の祖型とみなす槐亭洞遺跡資料など弥生時代関係の資料調査を行う。杉原が韓国で資料調査を行う直接のきっかけが何であったかは具体的にはわからない。ただし、1972年に金元龍『韓国考古学概説』（東出版寧楽社）と金廷鶴『韓国の考古学』（河出書房新社）が刊行されて、韓国考古学を体系的に理解する好機となったことや、1971年に明治大学4年生の力武卓治が武器形青銅器を卒業論文で取り上げ、韓国で資

料調査を行っており、その報告を受けたことも刺戟になった可能性が高い。1974年には忠清北道の松菊里遺跡において韓国で初めて遼寧式銅剣が発見され、集落の調査も続くなどの情報ももたらされ、弥生時代併行期の資料が続々と紹介されるようになっていた。1978年には、韓国ユネスコ委員会の招聘で、佐原真とともにソウルで開催された日韓青銅器シンポジウムに参加したのち、慶州・釜山を訪問して資料調査を行った。戦前に報告された慶州北方の漁隠洞遺跡と慶州博物館の韓炳三館長から教えられた大邱市坪里遺跡の小銅鏡に佐賀県二塚山遺跡と同范の実例を見出すなどの成果を上げている。この1973年と1978年の2回の訪韓で、韓国の主要な考古学者と知遇を得、さらにソウル大学校の李康承や釜山大学校の申敬澈といった次世代を担う若手考古学者との面識も得ることになる。

ちょうど同じ頃中国でも農耕文化の起源を考える上で重要な調査成果が報告される。1978年の浙江省河姆渡遺跡である。放射性炭素年代測定で6700BP前後という、華北の仰韶文化と肩を並べる古さの稲作文化が長江下流域に存在することが明らかとなり、杉原は弥生時代文化の稲作農耕の起源を知る上で重要だとして注目する。そこで、明治大学考古学陳列館開設30周年記念事業の一環として中国科学院古脊椎動物と人類研究所の賈蘭坡と社会科学院考古研究所の安志敏を招聘して、旧石器文化と新石器時代文化の起源に関するシンポジウムを東京と京都で開催する。さらには、河姆渡遺跡など稲作農耕文化の起源を求めて、中国で資料調査する計画も構想していた。

おわりに

本稿では、杉原荘介が戦後考古学界に果たした役割として、①学会組織の構築、②共同調査の実現と運営、③国際研究連携の推進の3点をとり上げた。なぜこのような役割を果たし、また果たし得たのかについては、様々なとらえ方がありえるであろうが、私は次のように考える。

①と②は、考古学を学んだのが独学であり在野の考古学者であることと、越前和紙を扱う商店の経営者であったことが大きいと考える。杉原は、晩年まで学生に「在野であれ」と叱咤していたように、在野精神に誇りすら感じている様子であった。学界の権威に従うのではなく、それに縛られることなく、こうあるべきと思うことに突き進むことに躊躇はなかった。戦後直後に、文部省人文科学研究課長犬丸秀雄の国立歴史科学研究所設立構想を巡って意見聴取をした際の若手考古学者たちに対して、「若い学者の行動が如何に老成学者に限定されているかということ、及び若い学者が如何に学界のあり方について不真面目であり、無気力であるかということを示し」と批判するところにそのことがよく表れている。また、そこには、同じ在野の考古学者の先達として指示した森本六爾が、帝室博物館を核とする考古学会と東京大学人類学教室を核とする東京人類学会のいわば官学系の学会とは別に、在野の考古学者が集う場として東京考古学会を組織して全国の考古学者を糾合したことも視野に入っていたであろう。森本は、例えば弥生時代が農業社会であることを論証するために同会の機関誌で、全国の考古学者に呼び掛けて靫跡のある土器など稲作に関する資料を集成するなど、誌上共同研究を展開した。杉原は、これら森本が実践した学会組織の構築と共同研究の実践をさらに発展させる道を選んだのではないだろうか。すなわち、ほかならぬ森本の在野精神を発展させることが念頭にあったのではないだろうか。

また、③は若き日に鳥居龍蔵に憧れて海外への目を開き、また語学の習得にも努力したこと、そして偶然にも市川に亡命していた郭沫若と巡り合ったことが大きい。戦後、思いがけないことに相沢忠洋からの情報を糸口に岩宿遺跡に巡り合い、また、偶然にも早い段階に中国への訪問も実現した。そこから

日本列島の旧石器時代文化を理解するためにアジアとシベリア・アラスカ・ヨーロッパの旧石器時代研究に学び、縄文時代の起源と年代を考えるためにアメリカの放射性炭素年代法を採用し、弥生時代農耕文化や青銅器文化の源流を知るために韓国と中国の考古学に学び、世界各地の考古学者との交流を重ねる道へと広がった。それは、偶然を含むごくわずかの機会をとらえたものではあったが、確実に自らの研究に取り込む結果を得ることができた。その結果、同時代における日本戦後初期という同時代の他の考古学者よりも積極的、かつ強力に海外の研究者との交流が実現することとなった。杉原が戦後考古学界に果たした役割・貢献の中に国際連携の推進も掲げておくべきである。日本古代学研究の国際展開の歩みの一つとして今後より一層の研究深化をはかることが望まれる。

【参考文献】

- 石川日出志 2013 「杉原荘介の弥生時代研究—没後 30 年を経て—」『考古学集刊』第 9 号, pp. 93-110
- 大塚初重 (編) 1984 『考古学者・杉原荘介』明治大学考古学研究室
- 斎藤忠・後藤守一・山内清男ほか 1952 『吉胡貝塚』文化財保護委員会
- 杉原荘介 1943 『原史学序論』葦牙書房
- 杉原荘介 1948 「学界消息」『考古学集刊』第 1 冊, pp. 30-32
- 杉原荘介 1956a 「縄文文化以前の石器文化」『日本考古学講座』3 (縄文文化), 河出書房
- 杉原荘介 1956 b 『群馬県岩宿発見の石器文化』明治大学文学部研究報告考古学第 1 冊
- 杉原荘介 (編) 1961 『日本農耕文化の生成 本文篇』東京堂出版
- 杉原荘介 (編) 1965 『日本の考古学 I 先土器時代』河出書房新社
- 杉原荘介 1974 「弥生式土器と土師式土器の境界」『駿台史学』34 (杉原 1977 『日本農耕社会の形成』吉川弘文館, 再録)
- 杉原荘介 1977 『日本農耕社会の形成』吉川弘文館
- 杉原荘介 1979 「弥生時代の研究と朝鮮半島」『1979 年度駿台史学会大会研究発表要旨』
- 原田淑人 (編) 1957 『中国考古学の旅 訪中考古学視察団報告』毎日新聞社
- 武義平 2002 『異文化のなかの郭沫若—日本留学の時代—』九州大学出版会
- 明治大学文学部五十年史編纂準備委員会 (編) 1981 『地歴科から史学地理学科へ—考古学専攻創設の頃—』明治大学文学部五十年史資料叢書 IX, 明治大学文学部
- 森本六爾 (編) 1930 『考古学』第 1 巻第 1 号, 東京考古学会
- 森本六爾 (編) 1932 『考古学』第 3 巻第 1 号, 東京考古学会
- 守屋幸一 (編) 2004 『特別展 考古学の基礎を固めた巨人—杉原荘介と前野町遺跡—』板橋区立郷土資料館
- 劉徳有 (村山孚訳) 1992 『郭沫若 日本の旅』サイマル出版